

短歌と教育②

谷岡亜紀

短歌との幸せな出会いの場を

カルチャーセンターの隆盛が示すように、「生涯教育」としての短歌の〈学び〉は、いわば人生を通じて普遍的なテーマだが、ここでは若い世代を対象とした、いわゆる学校教育に関わるものに絞る。私が担当する主なものは次の三つである。

海外子女文芸作品コンクールは、海外子女教育振興財団主催で、後援は外務省、文部科学省、日本放送協会。その短歌の部の選考を長く佐佐木幸綱先生が行って、私はそのお手伝いをして来たのだが、五年ほど前から選を任された。両親の海外赴任、定住など様々な理由で、多くの日本人・日系人の小学生・中学生たちが世界各地で暮らしている。彼らの日本語力確保と、日本の文化への理解を目的として開催されているのがこのコンクールである。その入選作品は毎年『地球に学ぶ』という本になっ

て。作品が本当に素晴らしい。ぜひ『地球に学ぶ』を手に取っていただけたらと思う。

神奈川県高校文芸コンクールは、神奈川県高等学校総合文化祭に連動するもので、県下の高校が毎年広く参加している。去年第三十七回を迎えた。故・島田修二さんから引き継いで、私は平成九年から「短歌」の選を担当している。これも入選作品は毎年素晴らしい。いつも痛感するのは、やはり良い先生、短歌に理解のある先生のいる学校とそうでない学校との、作品の質の圧倒的な差である。ここに「短歌教育」（と一口におこがましいが、要するに生徒諸君に短歌を好きになってもらうこと）の最大の課題がある。短歌に興味を持ってくれる若い世代がいなくなり、短歌を作る人口が減少し、次の世代へのバトンタッチが途切れる時、短歌というジャンルは確実に減びるだろう。問題は切実である。

早稲田大学教育学部で非常勤講師として担当している〈創作演習「短歌」〉は、今年の後期（秋学期）で二期目になる。各学期に開かれた講座だが、受講生はやはり教

育学部の学生が多い。だから私としては、短歌の作り方、読み方、歴史などとともに、短歌を学校でどう生徒に教えるかという点で、少しでもヒントを掴んでくれればと願っている。短歌との幸せな出会いが、短歌人口の増加に繋がりが、短歌の未来をより豊かにする。それを私もふたもない考えだとは思わない。そしてその幸せな出会いを現場で支える筆頭が、「短歌を愛する国語教師」である。先日、前文科省事務次官の前川喜平さんのお話で、国語指導要綱の次の改訂によって、小学、中学、高校生が短歌に触れる単元が縮小されるという、怖い話を聞いた。子供たちの若い脳が短歌に触れる機会をどう確保してゆくか。このことは短歌の未来に直結する。

- ・七夕に再会ちかう卒業式今度会う日はどの国だろう（オランダ・小学六年生）
- ・ブラジルの大地にひとつボールありひとりがあればみんな集まる

（ブラジル・中学三年生）

- ・友達と思われてるか心配で話しかけず言葉待った（神奈川県・高校生）
- ・はいきがすせかいはたぶん道化師で空っぽの夜月が笑った（神奈川県・高校生）